

ずいそう

福岡ダム紀行 ～週末チャリ旅～



岩本英司

東京を離れて初めての単身赴任生活が福岡で始まったのが2020年1月のこと。赴任早々、日本で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第1号が確認されると瞬く間に感染が広がっていき、生活様式が一変しました。福岡県においてもその4月に緊急事態宣言が発せられると、県境を越えて九州各地を訪ねていくこともままならない状況となりました。日々の活動において福岡市内に出向いていくことさえはばかれるようになり、週末を利用して東京に残してきた家族の元にもなかなか帰ることができなくなりました。そんな状況が続いた単身赴任生活も間もなく2年を迎えようとしています。新しい生活様式、の中で見つけた楽しみの一つが「週末チャリ旅」です。特に最近では、福岡市内からでも頑張ればいくつも見ることができるダム巡りを続けています。

1. 「密」を避けた楽しみに

赴任した時、前任者から譲ってもらった小さな自転車は最初、住んでいる場所の近所を探索する相棒として活躍していました。徐々に周辺の地図が頭に入ってくると、少し足を伸ばしてみようと、海岸沿いを通る国道202号で福岡市のお隣にある糸島市方面へ走ることが多くなりました。赴任するまで知らなかったのですが、福岡県最西端に位置する糸島は自然豊かで気軽に行ける人気スポットとして栄えています。ふらっと寄ったお店に置いてあった糸島の地図を見ながら、いろいろな場所に訪ねていきました。

海沿いを自転車で気軽に走るのは何とも気持ちが良い、コロナ禍でも「密」にならずに行える運動不足の解消と気分転換に最適な休日の過ごし方となっていました。繰り返すたびに初めて過ごす福岡の様子も少しずつ分かるようになっていきました。都市として発展めざましい福岡ですが、自然も近い場所にあり、週末のチャリ旅でいくつものすてきな風景に出会うことが出来ました。

当てもなく続けていた週末チャリ旅も2年目に入り、「せっかくだから気軽に見に行ける建築や土木の構造物を探して訪ねて行ってみよう」と思うようにな

りました。インターネットで福岡市周辺の地図を眺めていると、人口の増加に伴って水道用水と治水を兼ねて建設されたダムがいくつも存在することに気がつきました。

ちょうど仕事でも、ダムを取り扱うケースが増えていたこともあり。東京で生活している時、気軽に見に行くのも難しいダムは、遠い存在でした。単身赴任で一人過ごす時間も多いためこの機会を有効に生かそうと思い、ダム巡りが始めることとしました。訪ねていくダムの検索は、日本ダム協会がホームページ上で運営する「ダム便覧」が大いに役立っています。住んでいる場所からダムへの道のりをネット上の地図で何度も見てシミュレーションするなど、週末のチャリ旅への準備も平日の楽しみとなりました。

最初に訪ねたのが今年4月。行き先は福岡市早良区にある「曲淵ダム」です。1919（大正8）年に竣工した古い水道用の重力式コンクリートダムでしたが、1934（昭和9）年と1992（平成4）年の改修で嵩上げが行われており、ダム再開発事業の走りともいえるようなダムです。ダム管理所には、大正当時の曲折などが詳しく紹介されていて、2018年に選ばれた「土木学会選奨土木遺産」の銘板もあり、歴史の重みを感じさせられました。

本稿執筆までに訪れたのは11カ所のダムで、以下に列挙すると、

- ・曲淵ダム（福岡市早良区、1992年竣工、重力式コンクリート、堤高45m、）
- ・長谷ダム（福岡市東区、1993年竣工、重力式コンクリート、堤高53.8m）
- ・瑞梅寺ダム（糸島市、1977年竣工、重力式コンクリート、堤高64m）
- ・雷山大溜池（糸島市、1944年竣工、アース、堤高25m）
- ・牛頸ダム（大野城市、1991年竣工、ロックフィル、堤高52.7m）
- ・南畑ダム（筑紫郡那珂川町、1985年竣工、重力式コンクリート 堤高63.5m）
- ・鳴淵ダム（糟屋郡篠栗町、2001年竣工、重力式コンクリート、堤高67.4m）

- ・猪野ダム (糟屋郡久山町, 2000年竣工, 重力式コンクリート, 堤高79.9m)
- ・犬鳴ダム (宮若市, 1994年竣工, 重力式コンクリート, 堤高76.5m)
- ・北谷ダム (太宰府市, 1998年竣工, 重力式コンクリート, 堤高39m)
- ・須恵ダム (糟屋郡宇美町, 1964年竣工, アーチ, 堤高21m)

となります(それぞれのダムの概要は前出の「ダム便覧」を参考にしました)。



写真—1 最初に訪れた曲淵ダム(福岡市早良区)



写真—2 雷山大溜池(糸島市)の傍らに立つ記念碑



写真—3 アーチ式の須恵ダム(糟屋郡宇美町)

2. 記念碑に込められた思いを感じ

訪ねたダムの中で最も多い型式の重力式コンクリートは、ダムという土木構造物のスケールを提示するオーソドックな「かっこよさ」がありますが、ロックフィルの牛頸ダム、アーチ式の須恵ダムなど各種経緯から採用されたその他型式もそれぞれの赴きがあります。

須恵ダムは、黒部ダムに代表されるアーチ式として「世界最小」という時期もあったとか。今は徳島県にある高西ダム(堤高16.8m)にその座は明け渡しているようですが、美しく弧を描く堤体は、水道用水、治水・砂防という役割を果たし続けています。

ダムを巡る中で、各ダムがそれぞれの経緯があって計画されたことも分かってきました。糸島市にある「雷山大溜池」は、その名の通り農業かんがい用の溜池です。九州農政局のホームページに当たると、1934(昭和9)年の大干ばつで地域の農業に大きな影響を及ぼしたことが計画の発端となったようです。工事に対する地域の反対などもあったようですが、1944(昭和19)年の完成に至る経緯が、村長としてその実現に奔走した大原研介氏の功績とともに記されています。

雷山大溜池の右岸にもあるように、どのダムに行っても傍らに竣工記念碑を見ることができます。そこにはダム建設に携わった建設会社の皆さんはもちろん、地域の将来のために自らの大事な土地を明け渡すなど実現に向けて協力した多くの方々の思いが込められているだろうことを感じざるを得ません。

3. 地域の活性化につなげてほしい

これまでチャリ旅で週末に訪れたダムではありませんが、試験湛水を経てこの秋から本格運用が始まった小石原川ダム(福岡県朝倉市)は、寺内ダム、江川ダムとともに「あさくら3ダム」と呼ばれています。地元の朝倉市、東峰村や事業主体の水資源機構が協力して、「日本有数の水のふるさと」であることを観光資源に、2017年の「平成29年九州北部豪雨」で大きな被害を受けた地域の活性化に役立てていこうという活動が進められています。あさくら3ダム以外でも、国土交通省と民間旅行会社が連携したダムツアーも近年、各地で企画されています。

一方、前出した雷山大溜池や須恵ダムなどは、周囲がフェンスで覆われていることが残念でなりません。それぞれの管理上の理由があるのですが、雷山大溜池には周囲ともマッチした美しい風景が広がってい

ます。多くの方々に見て頂きたいお勧めスポットの一つです。

ダム本来目的ではないにせよ、自然豊かな場所に形成されたダムをもっと多くの方々が見て、楽しめる

ような機会を設けることが地域振興にもつながっていくのではないかと。ダムを巡るたびにそんなことを思っています。

——いわもと えいじ 日刊建設工業新聞社 九州支社長——

